

生命健康科学研究所紀要、第14号の発刊によせて

生命健康科学研究所 所長 古川鋼一

生命健康科学研究所紀要、第14号の発刊に際して、研究所所長としましてご挨拶を申し上げます。本研究所は、2004年6月に設置されて、もう14年になろうとしております。生命健康科学部の設置に先立って設置されて、学部創設の生みの親になったとのこと、ご存知の方も少なくなりました。この10年間以上を、様々な紆余曲折を経ながら継続・発展してきたこと、ひとえに研究所を支えていただいた多くの先生方や大学関係者の皆様のご尽力、ご協力の賜物と、心より感謝申し上げる次第です。

本研究所は、病気を予知・予防し、病気にならず、健康・長寿を享受し全うする生活を旨とした「21世紀の健康を科学する研究所」として活動を進めて参りました。超高齢化社会を迎えつつある現在、「よりよく生きる」ために、ライフサイエンスに立脚した新しい開発型科学技術の創成を目指してきました。今や国民の半分が罹患する悪性腫瘍や着実に増える認知症などの神経・精神疾患、糖尿病などの生活習慣病や新型感染症など、様々な健康障害と疾病を対象にして、その発症・進展機構の解明、予防と治療法の開発、および看護と介護のための新たな医療・看護技術等の開発と教育システムの開発のための研究を推進しています。

実際、本研究所では、この10年間に二つの大型企画が文科省等により採用され、大型研究プロジェクトとして展開しました。まず、平成20年に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された『生活環境因子誘発性疾患の予知・予防に関する戦略的研究』であり、その内容は独立した研究部門“ヘルスサイエンスヒルズ”として展開中です。ここでは、慢性炎症の遷延から悪性腫瘍や神経変性症などの難治疾患への進展過程の解明と先制予防に焦点化して、平成28年度から始まったBranding事業の研究提案を行いました。現在、平成30年度の申請に向けて準備中です。もう一つは、地域医療の問題点追及、高齢者の心身病態の追求、障害者や在宅医療を支援する医療機器、介護器具、携帯治療・診断機器の開発などに関する研究をふまえ、平成25年度に採択された文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の一環、「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」です。ここでは、本学と春日井市が連携し、大学の持つ人材や技術、知の資産を活用して地域再生・地域活性化に取り組んでいます。

現在、本研究所は4部門からなっており、メディカルエンジニアリングリサーチ部門（臨床工学科中心）、一次予防教育研究部門（スポーツ保健医療学科中心）、ヘルスサイエンスヒルズ部門（生命医科学科中心）、保健看護学領域部門（保健看護学科中心）が存在します。それぞれの部門が相互に連携を図りつつ、研究所のミッションを果たすために奮闘を続けてきました。すなわち、研究環境の整備と促進、若手研究者の育成と大学院学生の研究支援、そして新規の大型プロジェクト獲得に向けての研究推進と実現に向けた具体的な活動、

に要約される内容が研究所の実体、と言えます。とくに大学院生の研究と生活の支援は、「大学院教育委員会」的立場で教員と院生が協議できる場が存在しない現状では、それに代わる貴重な使命を担っているものと認識しております。しかしながら、大学院の充実を目指すにはあまりにも厳しい昨今の社会状況と大学の現状があることを看過できません。まずもって、大学院に入学して、研究を主たる活動として励むことが可能な学生数が極めて少なく、その状態は次第に後退していることを実感しています。この現状をなんとか改善して、研究したい者が十分に研究できる環境の整備に大学とともに努めることが、研究所の使命として提起されているものと考えます。

さらに、本研究所は、生物機能開発研究所との共催による「中部大学ライフサイエンスフォーラム」を例年企画し、生命・健康科学の進歩について広く最新の知見を提供しております。本年度は11月29日に第12回のフォーラムを開催し、理化学研究所多細胞システム形成研究センターの網膜再生医療研究開発プロジェクトマネージャーの小出直史氏に、「再生医療の到達点と課題」というタイトルで、進展する再生医学研究と臨床応用の現状につきお話をさせていただきました。また、同時に講演をお願いしました浜松医科大学の針山孝彦氏には、「生物を学び活かすバイオミメティクス研究と、ツールとしての NanoSuit®法」というテーマで講演をしていただき、最新の生体試料の観察技術の到達点につき紹介させていただきました。全体で294名の参加者があり、会場となった5122講義室があふれて立ち見者が出て、多くの質問が続出するなど、多くの学生、研究者が感銘を受け今後の研究に資すところ大と思われました。ご講演の内容の一部を本紀要に掲載しておりますので、是非、ご覧ください。

以上、本研究所の活動実績をふりかえって、本研究所が生命健康科学部の研究を牽引する拠点となっていることを実感するとともに、今後の生命健康科学部の研究推進及び若手研究者や大学院生の育成の場として存続し貢献していくことが、研究所の重要な使命となっていくものと痛感いたします。研究所の活動として、これらの目標に沿った皆様からの様々なご提案をお待ちしております。できるだけ、年度はじめからご提案を実施に結びつけていく所存ですので、よろしくご協力のほど、お願い申し上げます。そして、これらの研究活動の学内外への紹介・発信の一助とするために、この紀要がお役に立てばと願うものであります。皆様のご助言と一層のご支援をいただきますようお願い申し上げます。